

A Russian-Japanese Phrasebook of Kurono Yoshibumi (St. Petersburg, 1894)

KOBAYASHI, Kiyoshi

Key words: Kurono Yoshibumi, Japan-Russia Exchange, Language Education, Russian Language, Japanese Language, Kanagawa University Library

Abstract

KURONO Yoshibumi (born in Edo, died in Petrograd, Russia, 1918) was a Japanese scholar. He began his career as a Russian language teacher, and worked in the Tokyo Institute of Foreign Languages (now: Tokyo University of Foreign Studies) and the Ministry of Education of Japan. In 1886 he left for Russia and in 1888 assumed the position of Japanese language teacher at St. Petersburg University. For 28 years he taught many future talented Japanologists such as N. Konrad, N. Nevsky and S. Elisséeff. He also wrote textbooks on grammar of the Japanese language. Kurono never returned to the motherland.

Kanagawa University Library has one of his textbooks called “Rowa Tsuzoku Kaiwa Hen/Russko-japonskie razgovory (Russian-Japanese Phrasebook)” (1894).

In this paper we survey its bibliographic data (including a hand stamp of the former owner), contents and his description method. This book provides material about:

- the biography of the author,
- the history of the Japanese language and Japanese language education,
- the history of Russian language education by Japanese.

黒野義文『露和通俗会話篇』について¹⁾

小 林 潔

1. はじめに

黒野義文（くろのよしぶみ）。姓は黒埜とも書く。江戸生まれ、生年不詳。1886〔明治19〕年9月、東京外語ロシア語教師と文部省の職を捨て単身ロシアに渡る。ウラジオストクの女郎屋用心棒を経て、徒歩でシベリアを横断、帝都サンクト・ペテルブルク²⁾へ至る。1888〔明治21〕年にペテルブルク帝室大学東洋語学部日本語講師に就任。その後1916〔大正5〕年まで28年の長きにわたりその職をつとめ、幾多の日本学者を育てた。退職後もついに祖国に戻らず、1918〔大正7〕年ロシアにて没す。日露文化交流史とくに日本のロシア研究・ロシアの日本研究史においてしばしば言及される存在である。実際、その生涯と業績、歴史上の位置から興味深かつ重要な人物といえよう。本稿では、彼の主著とされ、ペテルブルクで刊行された『露和通俗会話篇』（1894〔明

1) 本稿は、2011年10月23日のロシア・東欧学会／JSSEES2011年合同研究大会（於東京国際大学）での口頭報告「黒野義文『露和通俗会話篇』—ロシア語教材としての位置づけ—」とその後知り得た情報と考察に基づくものである。

2) 以下、ペテルブルク。何度か名称変更があった。1914-1924年はベトログラート、1924-1991年はレニングラート、その後再び（サンクト＝）ペテルブルクに改称。

治27]年)をとりあげる³⁾。神奈川大学図書館にも架蔵されているもので(後述)、その書誌や内容を整理して提示する。これは黒野の生涯と業績の顕彰であり、文化交流史の中で黒野に正当な地位を与える試みにつなげるものである。

2. 黒野義文の生涯

黒野の生涯については既に幾つかの文献が描く。ただし、昔から判然としていたわけではない。ペテルブルクの日本語研究史をロシア人日本学者の論考の訳注という形で示した寺川喜四男たちは、黒野の名を挙げはするものの、わずかに「この人〔黒野〕は、帝政時代のロシヤおよびその後のソヴィエトの日本語教育界に、日本人講師としては最も永く関係し、数々の功績を残したといわれる」(寺川ほか1964: 50)と述べるだけで、その業績を明示しているわけではない。

いまなお不明点が残るものの、その生涯と業績についてかなりのことが明らかになったのは、西村庚、また、黒野の縁故という桜井良平の紹介(西村1962, 1964, 1965, 1971; 桜井1974, 1975)によると言える。西村・桜井の両氏の研究を出発点としつつ独自の調査を加え、現時点で分かりうる限りの黒野像を描いているのが沢田〔澤田〕和彦の研究(沢田2006)である。また、日本に於けるロシア語教育の歴史を振り返る際、例えば渡辺雅司が日本ロシア文学会編纂『日本人とロシア語』で言及しているが(渡辺2000)、あくまでも日本のロシア語教育史の一つ、すなわち東京外語教師としての捉え方である。黒野の教え子の一人はネフスキーで、ネフスキー伝の関連として加藤九祚が黒野に言及している(加

3) 本書は日本語とロシア語で書かれ、日本語の漢字、仮名遣い、ロシア語の正書法もともに古いもので書かれているが、本稿では適宜現在通用のものにあらためた。

藤 2011: 37-41)。しかし、これは、西村・桜井の記述に基づいたものである。

ロシアでは、日本学史の記述の中で黒野への言及は見られる。上述寺川ほか（1964）の原著である（と思われる）Петрова（1960）でも黒野のペテルブルク大学在籍期間と教科書を作成したことが挙げられている。ただし、具体的な書名などの揭示はない（寺川ほか（1964）の訳文による）。モスクワの日本学者アルパートフ（科学アカデミー東洋学研究所）は著書『ロシア・ソビエトにおける日本語研究』内「19世紀末—20世紀初頭の日本語教育と研究」の一節として「I. クロノと V. P. パナエフ V. Ya コスティレフ」を設け、その業績と著作を示し、特に黒野とパナエフ〔パナエフ〕との共著である日本語文法教科書の内容について解説している（アルパートフ 1992: 19-23）。黒野がその生涯の相当部分を過ごしたペテルブルク大学では、自身の学統を振り返る際に、日本語科黎明期⁴⁾の一存在として黒野の生涯と業績を挙げている。たとえば Рыбин（2005）はそのようなものである（リュビンはペテルブルク大学東洋語学部日本語科の現主任で、当該論文は東洋語学部 150 年記念の日本語科史である）。

まずは以上の先行研究に基づいて、黒野の生涯を確認しておきたい。

黒野義文は幕臣の子、江戸生まれである（彼の母語が江戸弁・東京語であったことは意味を有する）。生年はしばしば 1859 年とされ、アルパートフ（1992）や Рыбин（2005）のみならず幾つかの便覧ではそうになっているが、父親の没年と齟齬があり（父親の没後 11 年に生まれたことになる）、間違いだとされる。

4) 日本語科目設置は 1870 年、講座の認可は 1898 年、コスティリョーフ〔コスティレフ〕が初代助教授になったのが 1907 年、日本語の必修科目化は 1908 年のことである（寺川ほか 1964: 51; 沢田 2006: 490）。

黒野は、1872〔明治5〕年にロシア正教宣教師ニコライ（カサートキン 1836-1912）が神田駿河台に設立した露語学校に入学した（1859年生なら13歳）。翌1873〔明治6〕年、東京外語が設立されるとその求めに応じてニコライのロシア語学校から生徒が移籍し、黒野も上等第六級に転入して魯語科第1期生となった。同級生に村松愛蔵がいる。その後は東京外語で教鞭をとるようになり、活字になった日本最初の露語辞典『露和字彙』の編纂にも1877〔明治10〕年から関わった（1859年生とすれば18歳のことである）。辞書の刊行は1887〔明治20〕年である。1879〔明治12〕年には外語露語科助訓、1881〔明治14〕年には助教諭に昇進している。教え子に二葉亭四迷こと長谷川辰之助がいた。外語時代には、和服着流しに鉄杖、学校付近の牛肉屋でビールと牛鍋を十人前以上平らげるのを常としたという奇人ぶりを語るエピソードが伝わっている。妻子はいたという。

1884〔明治17〕年には文部七等属として文部省に転任した。文部省では編集局で『露和字彙』編輯にあたった。

1886〔明治19〕年9月、黒野は日本の職を辞し、ウラジオストクへと渡る。当地では日本の娼家の用心棒をつとめたという。その後、シベリアを横断してペテルブルクに至るが、この6ヶ月かけた単身徒歩シベリア横断は、嵯峨寿安と西徳二郎に続く日本人3人目のことで、かの二葉亭四迷をして「世にあやしき人」と言わしめたという人物の面目躍如たる所以である。

1887〔明治20〕年11月にペテルブルクに到着し、翌1888〔明治21〕年、ペテルブルク大学東洋語学部の日本語講師として採用された。これはペテルブルク駐在公使西徳二郎の推挙によるもので、西自身も日本語講師をつとめた経験があった。黒野はペテルブルク大学第4代目の日本語講師である。その後1916〔大正5〕年まで28年間の長きにわたりそ

の職にあった。この在職の間に彼は、スパルヴィン (Спальвин Е. Г. 1872-1933)、コンラト (Конрад Н. И. 1891-1970)、ネフスキー (Невский Н. А. 1892-1937)、エリセーエフ (Елисеев С. Г. 1899-1975)、言語学者ポリワノフ (Поливанов Е. А. 1891-1938)、日本学者ローゼンベルク (Розенберг О. О. 1888-1919)、プレトネル兄弟 (Плетнер Орест В. 1892-1970; Плетнер Олег В. 1893-1929)、ラミング (Ramming, Martin N./Рамминг М. Н. 1889-1988) といった将来の優れた日本学者を育てた。

スパルヴィン〔スパルウキン〕は1899年にウラジオストクに設立された東洋学院の日本語講師となり教育・研究に従事した。日本語の著作もある(『横眼で見た日本』(新潮社、1931〔昭和6〕年))。コンラトはソ連日本学の中心人物であり、優れた日本語辞典を編纂し、多くの日本学者を育成した。ネフスキーは民俗学者で柳田国男・金田一京助らと交流し、東北また沖縄や台湾、西夏の研究も行った。エリセーエフも日本に留学、夏目漱石と親しく交わり、革命後、ロシアを離れるとフランスとアメリカで教鞭をとり多くの日本学者を育てた。ライシャワーやキーンなどもエリセーエフの弟子である。ポリワノフは音韻論で優れた業績があり、現在のキリル文字による日本語転写法は彼の創出したものとされる(キリ字ともいう)。ローゼンベルクは夭折の天才。4年間の日本留学中に漢字辞典と仏教事典を編纂したほか、留学の成果で俱舍論を扱った『仏教哲学の諸問題』(1918)を著し、和辻哲郎ら日本の学者の研究にも影響を与えた。プレトネル兄弟のうちオレストは長らく大阪外語大の教員をつとめ多くのルシストを育成した。ドイツ日本学の祖ともいべきラミングはコンラトの同級生で、後にベルリン・フンボルト大学教授となった⁵⁾。従って、人的な系譜から言えば、ロシア、ドイツ、

5) これらの人物を対象とした文献は多いが、寺川ほか(1964)のほか、最近では例えば、加藤(2011)、倉田保雄(2007)、Kobayashi(2003)、沢田(2007)、ディボフスキー(2009)などがある。

フランス、アメリカの日本研究は黒野義文にその起源を持つと言ってあながち間違いではない。もっとも、その教育に関する否定的な評価も散見される。加藤（2011）が示すコンラトの証言では、「当時日本語を知っていて、私〔コンラト〕たちといっしょに会話のレッスンをやってくれたのはクロノさんだけでした。はっきり言って、クロノさんの学識は不十分なものでしたし、教授法もなにもありませんでした」（加藤 2011: 39）とある。学統という点でも議論の余地があるだろう。アルパートフは「〔……〕クロノと〔共著者〕V.P. パナエフの著書はロシアの日本学の発展に何の足跡も残していないようである。彼らの独創的な考えは継承されていない。」（アルパートフ 1992: 22）としている（「独創的」ではあったわけだ）。

ベテルブルクに於いて黒野は日本語とロシア語の教材の編纂・執筆を行った。その業績は、編著書7点、監修書1点、翻訳書1点、論文1点とされている（沢田 2005: 491）。代表的なものとして沢田（2005: 491-493）と Рыбин（2005: 16）とで共に言及されているものを挙げると以下の通りである。いずれも日本語とロシア語双方の書名を持っている。

『日本の伊呂波 附綴字及凡例』（1888〔明治21〕年）、48頁

Курино И. (сост.) Японский алфавит с приложением складов и примеров. СПб., Лит. А. Иконникова, 1888., 48с. (Литогр. изд.)

『日本語学習入門』（1888〔明治21〕年）、125頁

Курино Иосибуми (сост.) Введение в изучение японского языка. СПб., Тип. В. Безобразова и Комп., 1888. 125с.

『露和通俗会話篇』（1894〔明治27〕年、これは実際は1893〔明治26〕

年刊行と言われる。)

Куроно И. (сост.) Русско-японские разговоры с приложением японских пословиц, поговорок и т. п., переведенных на русский язык, и некоторых русских пословиц с переводом на японский язык. СПб. Лит. А. Иконникова, 1894. IX+630 с. (Лти. изд.) [直訳すれば：黒野義文編『ロシア語・日本語会話集 附 日本語諺・慣用句など露訳および幾つかの日本語訳付ロシア語諺』、ペテルブルク、イコーンニコフ石版印刷所、石版印刷]

パナーエフとの共著『戦時必携 露和対話篇 合小辞林』（第2版1904〔明治37〕年）

Куроно И., Панаев В.П. Военный русско-японский толмач и краткий систематический словарь. 2-е изд. С применением японского шрифта «катакана» и иероглифов. СПб., Типография В. Киришбаума, 1904. 68с.

パナーエフとの共著『日本語独習の鍵』（1913〔大正2〕年）

Куроно Иосибуми, Панаев В.П. (сост.) Ключ к самоучителю японского языка. СПб., Типография В.Ф. Киришбаума, 1913. 52с.

パナーエフとの共著『日本語独習』（1913〔大正2〕年）

Куроно И., Панаев В. (сост.) Самоучитель японского языка. СПб., Типография В.Ф. Киришбаума, 1913, LXXX+539+38с.

共著者のパナーエフのことはよく分かっていない。上述共著の表紙には帝室ロシア地理学協会正会員とある。

黒野は著作では本名を使用している。一方で、ヨシフ・ニコラエヴィチ・クロノというロシア名も持っていたことが伝わっている。ロシア正

教徒になったかどうかは不明である。日本人との交際を避けたりはせず、むしろそうした機会を楽しみにしていたとされるが、普段の生活はひっそりとしたものであった。

1916〔大正5〕年にペトログラート大学を退官。ロシア革命とそれに続く内戦の中、1918〔大正7〕年12月8日（露暦11月25日）ペトログラート近郊で急逝した。流行性感冒もしくはコレラが死因とされる。大学時代の同僚たちによる葬儀は同年12月20日のことであった。ロシアにも日本にも子孫はいるとのことである。

3. 『露和通俗会話篇』の書誌について

彼が編纂した教材の中でも名著とされているのが『露和通俗会話篇』である。題目通り日常で遭遇する種々の表現を集めた日露会話入門書であり、テーマ別のレキシコンでもある。付録に諺語俚語紹介がある。本書の内容の検討に入る前に、まずは書誌データを確認しておきたい。本書は稀覯書と言って良からうが、印刷物であり、内外の幾つかの図書館に所蔵されている。しかしそれら各所蔵図書館の書誌データを見てみると、刊行年や頁数に違いがあることに気づく。

モスクワのロシア国立図書館（РГБ）の電子カタログを見てみると以下のようにある。

Куроно, Иосибуми (1859–1918).

Русско-японские разговоры: С прил. яп. пословиц, поговорок и т. п., пер. на рус. яз., и некоторых рус. пословиц с пер. на яп. яз.: Сост. для студентов Фак. вост. яз. Иосибуми Куроно, преп. при Импер. С.-Петербург. ун-те. - Санкт-Петербург: лит. А. Иконникова, 1894. -IX, [7], 631 с.; 28. Написано от руки.

Литогр.

(http://www.rsl.ru/; 一部抜粋)

先に示したロシア語タイトルで登録されており、東洋語学部学生向けにペテルブルク帝室大学講師黒野がペテルブルクで編纂したこと、印刷所名、発行年、判型、頁数、手書き原稿の石版印刷であることが示されている。ここでは1894〔明治27〕年刊行、631頁となっている。ペテルブルクのロシア公共図書館（РНБ）での書誌もこれと同じである（http://www.nlr.ru）。

日本の所蔵図書館のものを見てみると、早稲田大学図書館では

Русско-японские разговоры: с приложением японских пословиц, поговорок и т. п. переведенных на русский язык, и некоторых русских пословиц с переводом на японский язык / составил Иосибуми Куроно.

出版事項 [s.l.: s.n.], [n. d.] / 形態 630p.; 28 cm. / 注記 Reprint.
Originally published: S.-Peterburg, 1894. / 分類 887.8 njb/9

(http://www.wul.waseda.ac.jp/index-j.html)⁶⁾

とある。東京大学文学部や東洋文庫、北海道大学図書館での書誌も同様である。すなわち1894年刊行、630頁である。ただし、早稲田と北大では「リプリント」という表記がある。早稲田大学所蔵本の現物を見る限り、その判断は筆者には不可解である。

神奈川大学図書館にも所蔵されており、その書誌データは以下の通り。

露和通俗会話篇 / 黒埜義文編纂 || ロワ ツウゾク カイワ ヘン

6) また、『洋書目録露文図書篇 第1巻 1882—1965』（早稲田大学図書館、1966年）：211頁。ただし現在では「古書」扱いとなり、請求記号もホ 9/1706 から F887/00005 に変わっている。

出版・頒布事項レニングラード：黒埜義文, 1889

形態事項 630p; 28cm／注記 背の書名：Русско-Ялонские Разговоры
ロシア語併記〔誤記ママ〕 (<http://www.kanagawa-u.ac.jp/library/>)

すなわち、1889〔明治 22〕年刊行、630 頁である。

国立国会図書館のデータにはこうある。

TR：露和通俗會話編^{ママ} || ロワ ツウゾク カイワヘン

PUB：聖彼得堡府：〔出版者不明〕, 1889

PHYS：256p; 28cm／NOTE：露文併記／NOTE：帙入

(<http://www.ndl.go.jp>)

1889〔明治 22〕年刊行で、256 頁という。

以上のように同著者同書名の同一本を記述しているはずでありながら、刊行年（1889 年と 1894 年）と頁数（256 頁あるいは 630 もしくは 631 頁）とで違いが見られる。

このうち、頁数が 630 頁もしくは 631 頁というのは本質的な違いではない。日本の書誌では 630 頁、ロシアの書誌では 631 頁となっている。数え方の作法の違いによるものか。本文は 630 頁までであり、正誤表を含めれば 631 頁である。国会図書館蔵のものは筆者がそのマイクロフィッシュを閲覧した限り落丁本であり、要は 256 頁までしか所蔵していないということである（従って、別に一部数調達するなどして補うことが望ましい）。書名の表記も「會話篇」を「會話編」としている。

発行年に関しては、沢田は「実際には 1893 年刊行」としているが（沢田 2006: 492）、書籍自体にその表示はない。神奈川大学所蔵本に欠く（例えば早稲田大学所蔵本にはある）「表紙」（写真 1）には 1894 年

の年号が記され、黒野の署名のある序文（露語）は1893年12月5日になっていることから（写真2）、1893年もしくは1894年刊行であることは確かであろう。書誌掲載の場合は1894年ということになろうか。

1889年とされているのは、序文の後にある標題紙に和文で「黒埜義文編纂 露和通俗會話篇 一千八百八十九年 聖彼得堡府梓行」（写真3）とあるからであろう。実際、製作は1889年で4年後の1894年に序文をつけて刊行したとも考えられる（参照：倉田一夫1986：3-4）。「表紙」裏面（従って神奈川大所蔵本にはない）には

皇帝批准の大学法令 138 条および 1889 年 5 月 24 日の東洋語学部
の決定に基づき、1889 年 5 月 25 日に石版印刷を許可する。学部長ヴェ・
ワシリエフ / 管掌ア・ポズネエフ

という文言が記されている。

なお、8枚16頁ごとに「リスト〔原稿・紙量の単位〕」の番号が印刷所名と共にフッタに示されているが、第1リストの始まりは和文で1889年の年号が示されている標題紙である。リストは全部で40、第40リストは4枚7頁（正誤表含む）である。標題紙以降がまとまって製作されたものであり、序文や表紙は後日付加したものと推定できる。

以上より、2つの年号が生じたシナリオは以下のように想定される。

- ・黒野は1889年春までに石版印刷用あるいは審査用の原稿を用意した。
- ・1889年5月にそれに基づいて印刷許可が出た。直ちに印刷が始まったのか、そうではなかったのか、印刷にどの程度の時間がかかったのか、は不明である。ともかく何らかの事情により1893年にな

った。

- ・黒野は印刷後もしくは印刷と並行して 1893 年 12 月 5 日付の序文を認めた。
- ・1894 年の年号の入った表紙をつけて刊行。

ちなみに、国会図書館のものでは標題紙の「黒埜義文編纂」が削り取られているように見える。落丁といい不思議な存在である。

早稲田大学図書館等の書誌にある「リプリント」の表記はおそらく、この 2 つの年号の存在を解釈——1889 年版（あるいは別の版）を 1894 年にリプリントして序文や表紙を付けたのだと——したが故と思われる。もちろん、幻の 1889 年版があり、4 年後にそれをリプリントしてあらためて 1893 年付の序文と表紙とをつけて刊行したということは想像可能である。しかし、印刷に 4 年かかった、あるいは、（リプリントではなく）既に印刷済みのものに序文と表紙を付加して後日刊行したと考えるのが自然と思われる。ロシアの国立図書館の書誌作成者がリプリントであること、あるいはオリジナルの版があることを見落とすとも思えないし、先行する版があれば所蔵データを示すであろう。（ロシアの図書館所蔵のものは未見。むろん、ロシアにあるのがオリジナルで、筆者が閲覧した早稲田大学本、神奈川大学本等が全てリプリントという可能性もあろうが）。

4. 神奈川大学図書館所蔵本について

請求記号 B887-26 (ID0003015564)。製本されているが、原本の「表紙」を欠く。

筆者の問い合わせに対する神奈川大学図書館資料サービス課の吉場千

絵氏の回答によれば、神奈川大学所蔵本は1988年4月に架蔵となったもので（88年4月7日のシールが貼付）、日ソ書店から購入された。ロシア語書籍を扱う専門業者である。しかしどのような経緯で本書を日ソ書店が手に入れたのか、神奈川大学からの何らかの注文があったのか、教員が介在したのか、といった記録は神奈川大学図書館には残っていないとのことである。書店（現在の名称は日ソ）側にも照会したが記録はないとの返事であった。当時、ロシア語教員であった中本信幸氏（現名誉教授）および現在の日ソ代表で長らく神奈川大学担当でもあった鈴木孝司氏にも訊ねたが、詳細は不明である。ただし、神奈川大学は、亡命ロシア人の子孫で日本生まれのロシア人詩人であったコンスタンチン・トロチェフ（トルシチョーフ／Constantine Troutscheff/Father Alexander 1928-2006）⁷⁾ 経由でロシアの古書を相当数購入している。また、もとの所蔵者は序文に押された蔵書印が示している（写真4）。青インクのスタンプと思われるもので、島根県立大学のワジム・シローコフ（В. Широков）准教授の教示によれば「Изъ книгъ ВитСкородумова」と読める。ロシア語旧正書法表記で「Vit. スコロドゥーモフの蔵書から」の意である。ヴィターリー・アレクサンドロヴィチ・スコロドゥーモフ（1880-1932）はロシアの外交官で、在日ロシア大使館通訳（1908-1914）、在神戸ロシア領事（1914）、在長崎ロシア領事（1914-1915）を歴任した。1923年からは在神戸領事館で主任外交官として亡命ロシア人の問題に取り組んだ人物であり、「亡命ロシア人協会」の中心的存在であったという。トロチェフ氏が神戸生まれであることからトロチェフ家とスコロドゥーモフ氏とに個人的な繋がりがあられ本書もトロチェフ氏のもとに至ったと考えられる由。もしくは、日ソ書店は外務省に務めて

7) 晩年に正教会の神父となった。シアトル正教会日本代表だったともいう。彼については Father Nicholas (2006), 沢田 (2007: 155-183) ほかを参照のこと。

いた日本人からロシア語古書を購入したことがあり、この外務省員が在神戸ロシア領事館の閉鎖後の処理に関わっていたとすればスコロドゥーモフの遺族から本書を入手し日ソ書店に転売した可能性もあるという⁸⁾。

神奈川大学所蔵本には書き込みも見られる。12-13 頁に「若しも三月が年の始なら臘月（シハス）は第十月となる」（13⁹⁾）の「臘月（シハス）を○で囲んでいる。対応するキリル字による発音表記では「си-васу нга дай цзіу-ни-гвацу то нару〔シワスが第十二月となる〕」（12, アクセント表記は省略）と誤記されている。そして、ни〔二〕のところに二重下線が引かれ、誤記が指摘されているのである（写真5）。

なお、製本された背表紙には著者名とロシア語タイトルの略記が示されているが、ЛКУРОНО/ЯЦОНСКІЕ РАЗГОВОРЫ と誤記されている。正しくは I. КУРОНО/ЯПОНСКІЕ РАЗГОВОРЫ〔I. Kuroono/日本語会話〕とあるべきである。購入時に「表紙」があったかは不明だが、「表紙」以外にロシア語のこの書名は書かかれていない（「リスト」ごとのフッタにもない）。従って、製本段階ではロシア語タイトルをあらわす何らかの拠り所があったと思われる。神奈川大学図書館のカタログにはロシア語タイトルが所蔵情報「注記」として登録されているが、「背の書名：Русско-Ялонские Разговоры ロシア語併記」とのみあることから購入時には既に製本され、「表紙」を欠いていたのであろう。Ялонские は Япoнские の誤記。本来なら Разговоры とあるべき語も Разгoвoр と登録されており、в(v)/6(b) の取り違い及び複数形語尾の脱落がある。現物がそう表示されている以上この表記は仕方がないと言わざるをえない。図書館登録時に「表紙」に基づいたとすれば（すなわち何らかの理由で神奈川大学で「表紙」を廃棄して製本したとすれば）、刊行年は 1894 年と

8) 以上、全て私信・口頭でのやりとりによる。問い合わせに快く応じてくださった方々に感謝の意を表する。

9) 以下、著者書名等を示さず数字のみを挙げた場合は本書の頁数を表すものとする。

登録され、書名も完全に書誌に掲載されたはずである。いずれにしる現時点で「表紙」を欠くため神奈川大学図書館のカタログを1894年に訂正すべき積極的な証拠がない。しかし、序文には1893年の日付があり、他図書館でも1894年とされているのだから、1889年としたままにするのは宜しくないだろう。少なくとも何らかの注記があった方が望ましいと思われる。

5. 『露和通俗会話篇』の内容

印刷は石版印刷（リトグラフ）。印刷の元となったのはおそらく黒野自身の手であろう。

3部構成、第一編は語彙とその例文、第二編は「談話」、そして付録として日露の諺語俚言がおさめられている。特に付録の日本の諺語俚言は、「日本人による日本の俚語の外国への本格的な紹介としては最も早いもののひとつである」（沢田2006：493）として評価されており、諺研究の学史でもそのように紹介されている（倉田一夫1986；北村2005）。ただし、本書全体をメインテーマとして考察した研究は皆無に等しい。

ロシア語の序文がiii-ixの7頁、「Иосибуми Куроно [Iosibumi Kurono] 1893年12月5日ペテルブルク」との署名、ロシア語目次が4頁、日本語目次はない。その後白紙があり、日本語タイトルの標題紙「黒埜義文編纂 露和通俗會話篇 一千八百八十九年 聖彼得堡府梓行」。その後、本文が始まる。

序文では本書の目的や記述方法が示されている。目的としては、

1. 学習者を日本の口語に親しませること、
2. 文字読解、特にひらがなとカタカナの実地練習をすること、
3. 漢字習得の手助けとすること (iii)

の三点が挙げられている。

本文は、形式としては見開き2頁で1セットになっており、4コラム(1頁に2コラム)構成。まずもっとも左のコラムでロシア語テキストが力点とともに与えられ、他の3つのコラムが日本語文である。左頁第2コラムで日本語の発音がキリル文字でアクセント符号とともに示され、右頁の2コラムでは、漢字カタカナ交じりの文と、万葉仮名(変体仮名)を含めた表記である(写真5参照)。この万葉仮名を黒野は「ナカガナ」と呼んでいる。従って、本書で使用されている文字は、キリル文字(ロシア字)、漢字、ひらがな、カタカナ、ナカガナ(万葉仮名(変体仮名))およびアクセント記号や句読点である。

本文の内容については桜井(1974)が、その附録の諺言俚言集については沢田(2006)が概要を紹介している。しかし、桜井(1974)には記述の省略の他、誤植もあり、現物と比べてみると補う必要を感じる。そこで、以下、章立てを示す。日本語の漢字仮名交じりの部分のみを挙げた。また、仮名は旧仮名で、途中までカタカナが用いられ、途中から漢字平仮名・変体仮名まじりとなっているが全てひらがなにあらためた。適宜、()内に用いられているふりがなを、[]内で補足情報を示した。章のナンバリングは、第一編では「第一」、第二編では「第一章」というようになっているが、便宜的にアラビア数字を用いる。棒線の後に開始頁を示した。

第一編(2—183頁)。

1. 一週の日の名——2
2. 昼夜の小分け——4
3. 月。十二個月——8
4. 四季——12

5. 時間の事——14
6. 元行（ゲンコウ）〔土・空気・火・水〕——20
7. 金属の名称——24
8. 色——28
9. 天気——30
10. 数の名（カズノナ）：奇数。勘定の数。／序数。順序の数。／分数
——36
11. 食物及飲物（タベモノオヨビノミモノ）——46
12. （食物（タベモノ））。食事（シヨクジ）——54
13. 食卓の事——56
14. 親族——60
15. 體の部分——64
16. 衣服。着類（キルキ）——74
17. 果実類（クダモノルキ）——82
18. 花類（ハナルキ）——86
19. 動物類——90
20. 学校の事——98
21. 家の事——104
22. 家具。室具——110
23. 奉公人。召使——116
24. 職業——120
25. 善徳及過失——128
26. みなか（田舎）のこと——134〔下線部は合字になっている。以下
同じ。〕
27. 鳥類（トリルキ）——144
28. 魚類。魚類。魚類〔ウヲルキ、サカナルキ、ギヨルキ〕——155

29. 普通ニ用ユル若干ノ動詞〔170-174 頁まで不定形列举／174-183 頁まで例文〕

第二編（184-455 頁） 軽易（ヤサシ）キ談話

1. 挨拶（敬礼）の事——184
2. 遊歩の事——194
3. 時間の事——196
4. 天気の話——200
5. 食事の話——206
6. 恩謝の事——214
7. 悦悲及怒（ヨロコビカナシミオヨビイカリ）のこと——216
8. 満足と不満足のこと——220
9. 年齢の事——224
10. 縫仕事のこと——228
11. 言葉の事——252
12. 入来の時——242
13. 稽古の事——246
14. 夏休（ナツヤスミ）に学校より暇の出ること——252
15. 田舎（キナカ）へ遊に行く事（アソビニユクコト）——254
16. 遊歩の後（ノチ）——258
17. 四季の事（又春夏秋冬）——258
18. 続き——262
19. 続き——264
20. 冬の事——270
21. 稽古の事——274
22. 続き——276

23. 手紙の事——280
24. 読書の事——284
25. 語学の事——288〔ローマ数字およびキリル文字翻字では「25」と
なっているが、右半分日本字箇所は四拾五となっている〕
- 〔第26章なし〕
27. 学問及技藝の事——292
28. 色色の技術の話——300
29. 続き——304
30. 手仕事（手工。手技）の事——308
31. 続き——310
32. 朝飯の事——314
33. 続き——316
34. 見舞（問候。伺候）の時——318
35. 人のことに就て問合せる事——322
36. 差出及面謁の事——324
37. 遊山（遊興）の事——326
38. 園の事（ソノノコト）——328
39. 続き——332
40. 遊歩の事——334
41. 続き——336
42. 洗礼の事——338
43. 葬式の事——342
44. 郵便の事——344
45. 水浴（ミヅアビ）——346
46. 書物を買う話——350
47. 晩餐の事——354

- 48. 時計師との話——356
- 49. 理髪師との話——360
- 50. 商人との話——362〔これ以降、漢字平仮名・変体仮名まじり〕
- 51. 仕立屋にての話——376
- 52. 遊行の話（タビノハナシ）——388
- 53. 税関——398
- 54. 旅券——404
- 55. 蒸気船の旅——408
- 56. 鉄道の旅行——430
- 57. 宿屋（客館）の話——444-455

日本諺語俚語及文句小集〔457-498 頁及び 499-595 頁〕

諺語 457-498〔1-201（各アイテムの番号）〕

俚語 499-516〔1-92〕

文句 517-595〔93-230〕

俄羅斯諺語抄日本語譯〔596-630 頁（1-234）〕

正誤表

ロシア語部分執筆にあたってロシア語話者の協力者がいたかどうかを示すものはない。何らかのネイティヴチェックを受けていたとは想像できるし、出版に当たって大学当局の「査読」を経ていたことは上に示した通りである。諺言俚言部分は黒野と日本公使館書記官加藤増雄が協力して書いたが、意義は全て黒野自身が執筆した（「序文」及び沢田 2006: 493）。

その他のソース、例えば、諸外国語でのロシア語教材あるいはロシア語～語会話集といったもの、諸外国あるいはロシア国内の非母語話者向

けロシア語教科書を参考にしたかどうかの情報は無い。文献として示されているのはヘボンの『和英語林集成』（後述）とダーリの『ロシア語諺集 Сборник Русских пословиц』だけである（vii, viii）。

会話例を補う「練習の文句」という例文群がところどころに挿入されている。

6. 史料としての『露和通俗会話篇』

6.1. 伝記史料として

この『露和通俗会話篇』は著者黒野の伝記の材料ともなっている。上に見たように日常生活の様々なことをテーマにしているので、著者自身の日常生活がそこに現れていると考えるのが自然である。よく引用される箇所を挙げる。

私は今日朝七時に茶を飲み、新聞紙を読み、其から外出して公園を散歩し、十時頃に街へ行き、料理屋で朝飯を食べ、仕立屋へ寄り着物を誂え、其から書籍館^{しよじやくかん}へ参り若干の書物を見読し、二時半に帰宅して食事を致し、三時十五分まで憩^{やすみ}椅子に横わって微睡し、咖啡^{ママ}を飲み、街で買うたる烟草を喫し、明日の学課を考え、読書致し、其から那方々^{あなたがた}の所へ上りましたのです。

（193 カタカナをひらがなに改変）

その他の箇所からもそうした日常を読みとることは可能であろう。

しかし、本書を日本語史料および日本語教育史の史料として、そしてロシア語教育史の史料としてみることも可能である。

6.2. 日本語および日本語教育史史料として

日本語史料として外形的なところではまず文字である。ひらがな、カタカナ、「ナカガナ」を用いるとしているが、このうちナカガナは国語学の便覧にも見あたらない用語である。しかし、変体仮名のことだと言えよう（あるいはヘボンの『和英語林集成』でいう万葉仮名。J. C. Hepburn (1815-1911) の辞書については後述）。現在の仮名の字体が定まったのは1900〔明治33〕年文部省の「小学校令施行規則」に於いてとされ、実際にはその後も様々な字体が使われ続けたし、黒野の執筆時には変体仮名は常用のものであって、学習上、考慮すべきと判断したのである。特に漢字とひらがなについてがそうで、以下のように重要性を述べている。

ひらがなアルファベットで読む練習の重要性をいっそう示す事情だが、日本史の多くの著作、殆ど全ての小説、詩歌・歌謡、多くの現代の日本の定期刊行物で大きな意義を持つのはひらがな字である。ひらがなは、そこで文法形式の表現のための補助記号となり、あるいは、テキストそのものとなっている。民衆的な書籍については言うまでもない。その読解はひらがなの知識なしには不可能である。

(vii)

日本語の発音に関する記述もある。黒野のこの『露和通俗会話篇』ではアクセントが4つに分類されている。平 (ровное)、鋭 (острое)、短 (короткое)、重 (тяжелое) で、本文中に記号で示されている。この分類はアメリカ人 Хесбрин がその和英辞典で示したという (iv-v)。ヘボンの『和英語林集成』(初版：上海；1867〔慶應3〕年、第2版：横浜〔印刷上海〕；1872〔明治5〕年、第3版：東京—丸善商社；1886年〔明治

19] 年) のことである。第2版から日本語文法が示され、そこに同様のアクセント分類がなされている¹⁰⁾。なお、『戦時必携 露和対話編 合小辞林』と『日本語独習』では、単純アクセント、低アクセント、平板または単純長アクセント、鋭または高長アクセント、短アクセントとされている(アルパートフ 1992: 21, 沢田 2006: 494)。

日本語の発音の解説およびキリル文字による転写についても解説されている。転写については、アルパートフが別の教科書『日本語独習』について下したのと同じ評価になろう。即ち、「[……] 音と文字が区別されず、音は文字から派生したもののように見られている。転写法については、クロノは他のロシアの日本学者と違って、同音だが仮名表記が異なる音節の書き方を変えたりして、日本語の伝統的な正書法のいくつかの特徴を残そうとした[……] 日本文字の仮名の書き分けをロシア語アルファベットによって写す試みはその後進展しなかった」(アルパートフ 1992: 21)。とはいえ、実際の発音を覚えても、日本語で書く場合には旧仮名での書き分けを求められていた時代であった。実際の日本語のテキストで同一の音書き分けられている以上、読解や作文の練習の便宜のために転写でもそれを示すのは一つの見識である。ただし、転写で書き分けられたものから更に実際の発音を導き出すというのは不便で発音を示してしまうのにも実際上の益がある。ヘボンの転写システム

10) 第3版(1886)の記述は以下の通り。The accent in Japanese words is made by a slight elevation of the tone upon the accented syllable; as a general rule, in words of two syllables it falls on the first; in words of three syllables on the penult; and in words of four syllables on the anti-penult. But the accent always falls upon the syllable that has a double or prolonged vowel sound; as, *iko*/o-/ , *yosaso*/o-/ , *ii-kakeru*, *ii-tsukeru*, *yu*/u-/ *meshi*. In words of two and like syllables, the accent varies; thus *ha'na*, a flower, has the accent on the first syllable; and in *hana'*, the nose, it falls upon the last. In *hashi'*, a bridge, the accent is on the final syllable; and in *ha'shi*, chop-sticks, it falls upon the first. No effort has been made to mark these accents. (ヘボン 1980: xiv, 斜字強調は原文による。)

第2版(ヘボン 1872: xv) もほぼ同内容。例語の一部が大文字になっていることと、最後の一文がないことだけが異なる。第1版(ヘボン 1966)にはかかる記述無し。

(いわゆるヘボン式は彼の辞書第3版(1886年)から採用)と黒野の転写法、教え子ポリワノフの転写法(キリ字)との関係、黒野が関わった辞典『露和字彙』との異同、本書での仮名遣いや句読法についての実際の詳細の分析は今後の課題としたい。

「鼻の音」も取り上げられている。нга, нги, нгу, нге, нго [nga, ngi, ngu, nge, ngo] で鼻濁音のことだが、これらは「おそらく、最近現れたもので、純粋な喉頭の音、га, ги, гу, ге, го [ga, gi, gu, ge, go] として発音される」(vi)と鼻濁音の衰退が既に指摘されている。

記録されている日本語の語彙に関しては、江戸生まれの幕臣の子という黒野の出自、および日本で過ごした地も江戸・東京であったことからいって、江戸から明治前半の日本語、しかも江戸弁が保存されていると考えて的外れではないであろう。本書には生活のさまざまな分野に於ける語彙と表現が収集されており、量的にも整っているので史料価値があると思われる。黒野は1886〔明治19〕年9月の離日以来、日本語環境に戻っていない。ペテルブルクにおいても日本人との交わりはあり、日本の書籍類も講読し、諸外国の日本語研究も読んでいたはずだが、日本語の日本での変化はフォローできていなかったであろう。実際、これ以降の著作でも「сестра милосердия〔看護婦〕」を「慈善婦人」と訳したり、「城壁」を「トリデ」とするなどしていたという(沢田2006: 494)。逆に言えば、本書(そして著作には)明治前半までの江戸語が発音にしろ語彙にしろ冷凍保存されていると考えることもできる。

方言に関しては「日本語の地域の言葉の方言的特徴は全て取り除いた」(ix)としている。日本の標準語の形成を考える上でも一定の史料価値があると言えるだろう。

本書中の例文の文体は、上に示した一日の活動を示した文言のごとく、既に言文一致と言って良いものとなっている。本書の執筆が1889〔明

治22]年として、既に1887〔明治20〕年に黒野の東京外語の教え子長谷川二葉亭が『新編浮雲』第一篇を坪内雄蔵名義で刊行している。「通俗会話」を示すという目的も作用して、黒野もかかる文体をものにすることができたのだと思われる。

いわゆる日本に関するランデスクンデの点でも興味深い。例えば第二編第五拾貳章「遊行〔たび〕の話」では日本各地の地名が挙げられ紹介されている。

上述のごとく、黒野の教授法は後に弟子たちからも批判され、教え子のネフスキーは1913〔大正2〕年に来日してその日本語が日本人に通じなかったとさえ言われるが（沢田2006: 494-495）、本書の日本語を見る限り、そこまで古びた日本語とは思えない。

6.3. ロシア語教育史史料として

本書は日本語学習の学習書として意図されたものであるが、日本人が作成したロシア語教材と見ることもできよう。日本を離れた日本人が外国で書いたものであり、それ故、日本のロシア語教育を考える上では必然的にエピソード的存在とされてしまうが、それでも本書をロシア語学書あるいはロシア語教材として取りあげ、黒野によるロシア語語彙や文法の取り扱いをしてみることは意味がある。日本人のロシア語への取り組みの歴史、また日本に於けるロシア語教育の歴史の一部が見えてくるからである。教育史における本書の位置づけを行い、史料としての価値を明らかにする作業が必要である。

黒野自身がロシア語学習者であったこと、ロシア語教師であったこと、露和辞典の編纂をもしたこと、かかる伝記的事実から言っても、本書の執筆に際しロシア語学習の観点がなかったとは考えられない。実際、黒野自身がロシア語教材として使用されることを念頭においていたことは

窺える。ロシア語の各単語には力点がふられているが、ロシア人向け教材ならばこれは不要である。通常のロシア語テキストでは力点は表記されず、辞書や教科書——例えば非ロシア語母語話者向けの——でのみ示される。この力点付加は黒野自身による。

第1コラムは、ロシア語のテキストを取めたもので説明の必要はない。しかし、但し書きをしておかねばならないが、ここで全てのロシア語単語にふした力点は私がつけたものである。なんといっても日本人のため、ロシア語を学び始めた初心者で、ロシア語の力点習得に大きな困難を感じている者のために行った。(iv)

単語集としての性格も有し、「普通に用ゆる若干の動詞」として68語がリストアップされている。ただし、本書は辞書ではなく、一つ一つの語の文法情報——体のペア、活用のタイプなど——は記述されていない。

быть, иметь, есть, кушать, пить, спать, одеваться, раздеваться, ложиться, просыпаться/проснуться, завтракать, обедать, ужинать, говорить, разговаривать, болтать, читать, писать, искать, принести, любить, ненавидеть, оскорблять, думать, идти, прогуливаться, работать, играть, видеть, рассказывать, носить, приветствовать, кланяться, плавать, кусать, стоять, садиться, смеяться, плакать, заплакать, мучиться, скучать, радоваться, сердиться, слышать, слушать, понимать, верить, ругаться, обещаться, сравнивать, брать, давать, ссужать, занимать, спрашивать, отвечать, купить, продавать, заказать, приглашать, отказать, получить, передать, вручать, командироваться, отправляться, жениться (ある (在、有)。いる。をる (居)。なる (成、為)。ですもつ持。有／たべる。くらふ。くらう。

くふ食。喰。喫 召上る。御食る／のむ飲／子る。いぬる寝。子むる
 眠。睡／きる着。衣物（服）を着る／着物（服）を脱／よこたはる横。
 臥。子る寝／目を醒す。醒る。／朝飯を食る／食事する。昼飯を食る
 ／晩飯を食る／いふ言。はなす話／話す。談話する／しやべる啗。
 空^{むだばなし}話する／よむ読／かく書。書^{かきもの}物する／さがす搜／持て来／すく好。
 愛する。可愛がる。好む／^{にく}悪む。嫌ふ／はづかしめる辱。輕蔑する／
 おもふ思。かんがへる考／ゆく。いく行。ま井る参。でる出／遊歩す
 る。散歩する／仕事する。働く／遊ぶ。戯むる。戯れる／みる見る／
 話す。物語（譚）る／擔ふ。負〔おは〕ふ。持つ。^{つけ}着る／敬礼する。
 挨拶する／辞宜する。宜く言ふ／浮ぶ。遊ぶ／食着く。かむ咬む。咀。
 噬／たつ立。とまる止／すわる坐。かける掛／わらふ。わらう笑／な
 く泣／泣出す／苦む。苦がる／^{さむし}寥がる。退屈する／よろこぶ悦。喜。
 うれしがる欣喜／おこる忿。いかる怒。腹立〔はらたつ〕／きく聞。
 聞及ぶ／きく聴。聴聞する。言事を聴〔いふことをきく〕／わかる分。
 さとる悟。曉。理解する／信ずる。信用する／受合〔うけあう〕。保
 證する／約束する／くらべる比。比較する／とる取／やる。あたへる
 與／かす貸。貸附る／借る。借用する／とふ。とう問う。尋る。聞て
 見る／こたへる答。對。返辞する／かう。かふ買。もとめる購／うる
 賣／あつらへる誂。注文する／ま子く招。^{しやうだい}請待する／ことはる固辭／
 うる得。請取〔うけとる〕／つたへる傳。通ずる／手渡す／出張する
 ／おもむく趣。出立する／妻を娶る） (170-175)

日本での辞書編纂の経験からして列挙は容易いことであつたろう。

さて、日本のロシア語教育の歴史を佐藤純一による「ロシア語教育関
 連略年表」(佐藤 2000) に基づいて振り返ってみると、黒野が生きた江
 戸期から明治期の主な出来事と主要書の刊行は以下の通りである。

- 1794 年 桂川甫周『北槎聞略』
- 1813 年 馬場佐十郎『魯語文法規範』
- 1856 年 橘耕斎入露
- 1856 年 ゴシケーヴィチ『和魯通言比考』（ペテルブルク）刊行
- 1867 年 ニコライ『魯話和訳』（箱館^{ママ}）刊行
- 1872〔明治 5〕年 外務省洋語学所設置、ニコライの魯語学校、開拓使立函館学校魯語科設立
- 1873〔明治 6〕年 東京外国語学校の設立
- 1887〔明治 20〕年 文部省編輯局『露和字彙』（黒野も参加）
- 1898〔明治 31〕年 グレーボフ『露西亜文法』（岩沢丙吉訳）
- （佐藤 2000: 427-430 を改変）

実際の教育には、ネイティブ教員の直接教授が見られ、手作りの教材や外国製の教材・便覧も使われていたのだろう。ともあれ、黒野が離日する 1886〔明治 19〕年あるいは本書執筆の 1889〔明治 22〕年までには辞書や文法書の類は辛うじてあったが、会話集はなかったと言える。言語教育において重要なのはオーセンティックなテキストであり、生の用法を具体的な文脈に即して提示することが必要である。この点に関して、黒野が示したこれだけの領域をとりあげ文章を集めた刊行物は、同時代の日本に関しては見出せない。黒野のこの著作は、現在の教授法の観点から言っても評価できるものである。本書は会話集であることを謳っているが、これは現在の言語教育の術語で言えば *разговорник* である。この辞書的定義は、「学習手段であり、口語を扱う、コミュニケーション領域を取り上げ、語彙とともに文のモデルを示す。また、発話の手本であり、アクティブなものにするための練習があり、テキストがあるも

の」また、「短期間の学習を目指したもの、具体的な言語活動を示し、相当程度、自習するもの」(Азимов, Щукин 2010: 241)である。このような定義からして黒野のこの著作はまさに разговорник と呼びうる。実際、様々な領域をとりあげ、語彙を例文とともに示し、発展練習のためのテキストを用意している。もちろん無い物ねだりをしようと思えばできる。著作の目的は日本語学習の便になるようにとのことであり、会話集と名付けている以上、仕方がないことであるが、「主張をする」「議論をする」という、例えば現在の語学教育で主流である「ヨーロッパ言語共通参照枠 (CEFR)」の最下級から示されている言語活動はない。いわゆる「高尚」なテーマもない。あくまでも「通俗」な分野である。黒野が育てた綺羅星のごとき教え子たちの活躍を思えば、黒野の実際の教育活動に於いては、そうした言語活動も「高尚」な日本研究も行っていたのかもしれない。だが、「通俗」会話が言語コミュニケーションの重要な領域であることは今も昔も変わらない。

7. おわりに

本書『露和通俗会話篇』と黒野のその他の著作、黒野が参照したであろう文献、そして黒野の弟子たちの業績との関係の詳細な解明は今後の課題である。

また、本書がどの程度利用されたのか、特に日本でのロシア語教育に於いて参照されたのか、あるいは実際に教場等で使用されたのか、も問題である。本書がロシアでの刊行物であり日本での所蔵図書館も多くないことを踏まえると、日本での利用は少なかったと判断せざるを得ない。しかし、日本では戦前戦後を通して内地外地でロシア語研究・教育が連綿と行われてきたのであり、黒野の生涯の詳細はともかく、その名は知

られていたであろう。そのような黒野の業績の日本での継承性を考究することはまた別の課題となる。「十九世紀末から二〇世紀初頭にかけてペテルブルグで刊行された彼の業績は、もっと高く評価すべきである」(沢田 2006: 497)。沢田のこの文言は今も有効である。

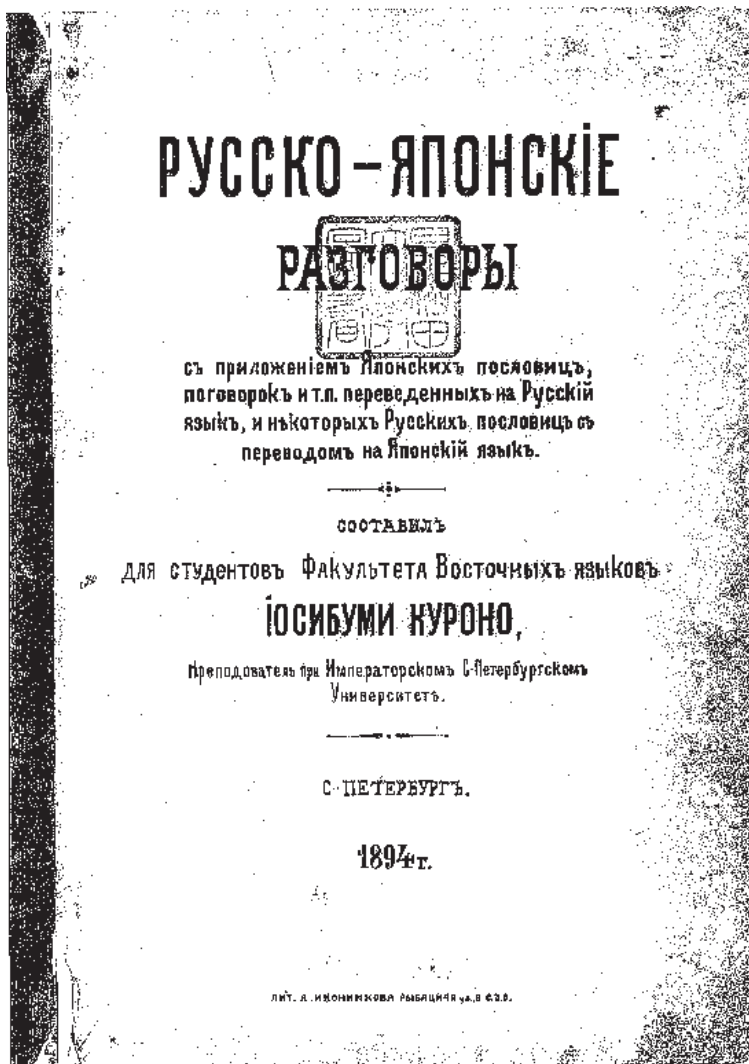
今後の中長期的な企画となろうが、本書を復刻刊行することは一定の意義を有することと信じる。相当量のコーパスと呼びうる史料を、日本のロシア語学史研究およびロシアの日本研究史そして日本語学に提供することになるからである。こうした企画には、ロシア研究者だけではなく日本語史の専門家も参加するのが望ましい¹¹⁾。

写真一覧 (1. 以外は神奈川大学図書館所蔵本から)

1. 「表紙」(1894 年)(早稲田大学図書館所蔵)
2. 「序文」の署名(1893 年 12 月 5 日)
3. 「標題紙」(1889 年)
4. 神奈川大学所蔵本旧所有者蔵書印
5. 本書 12-13 頁

11) 筆者は 2012 年 3 月にポスト削減に伴い神奈川大学を退職するためこれを行うことができないが、蔵書の活用を望むものである。

1. 「表紙」(1894 年)(早稲田大学図書館所蔵)



2. 「序文」の署名 (1893 年 12 月 5 日)

br. Poccia.
 5 Декабря 1893 г.
 С. Петербург.

Леонид Купцов

3. 「標題紙」 (1889 年)

黑埜義文編纂

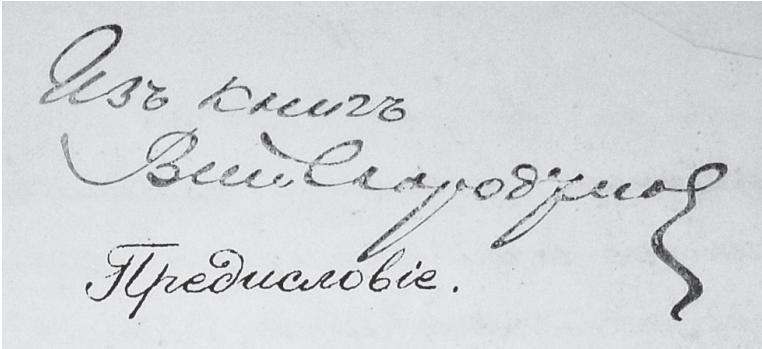
露和通俗會話篇

一千八百八十九年

聖彼得堡府梓行

天
 神
 大
 學
 書
 庫

4. 神奈川大学所蔵本旧所有者蔵書印



5. 本書 12-13 頁

Во Навро́нъ бѣвало турки. Послѣ того казнили се Маго́ма, тогда Делавро́ былъ вѣс- тиль мѣсяцъ.	Циръ-ици-эвауъ нѣ- хилъ неа оуриуъ Мониса самъ-эвауъ не тоси по каурициъ нѣ ри онъ-васуъ неа да ири-ни-эвауъ то торуъ	十^ゴ一^{イチ}月^{ゲツ} = ハ 露^ロが下^ゲル 最^{サイ}モ三^{サン}月^{ゲツ}が年^{ネン}ノ始^{ハジ}メ ナラ臘^{リョウ}月^{ゲツ}(シハス)ハ第^{ダイ} 十^{ジュ}月^{ゲツ}トナル	じふいちがつ は きり おたりる めいさんぐわつ がど のはじめから 三ヶ月 だいじふがつ とある
II. Времена года.	Лѣто онъ. Осень - ни.	第^{ダイ}四^シ 四^シ季^キ	た い し し き
Весна. Лѣто. Осень. Зима.	Хару Нацу Аки. Фую	春^{ハル} 夏^{ナツ} 秋^{アキ} 冬^{フユ}	はる なつ あき ふゆ
Глаголы въ употребленіи.	Вѣсѣю по мѣсяцѣ	練^{レン}習^{シユ}ノ 文^{モン}句^コ	きん^{キン}ふ^フのもんく
Менъ правится весна.	Вѣсѣю ва хару по сѣки досѣ.	私^シハ 春^{ハル}が好^{コト}マシ で	わたしハ はるがおとさ で
Сѣмена растутъ мѣся.	Нацу ва ки по ми неа хару (нари-мѣ)	夏^{ナツ}ハ 樹^キノ 實^ミが 生^ナ(生^ナ マス)	あつハきのみおなる (なりませ)
Да, а осенью онъ собирается.	Сѣ-то, соби́то аки ва исеи неа/уракари-мѣ	左^サ様^{サマ}ハ 所^{ショ}レヲ 秋^{アキ}ハ 集^ツ カ^カリ 集^ツマス	さよう。そうしてあきハ (うれが)ぐくしませ
Водите ли вы ре- ку?	Аи́ста ва фу́ю не о-суки досѣ ки?	那^ナ方^{ハタ}ハ 冬^{フユ}が 御^ゴ好^{コト}マ スカ	あなたハ ふゆが おと きてせか

文献

- Азимов Э.Г., Щукин А.Н. 2010. *Новый словарь методических терминов и понятий. (Теория и практика обучения языкам)*, М.: ИКАР.
- Петрова О. П. 1960. Кафедра японской филологии. *Востоковедение в Ленинградском университете*. Вып. 13: Серия востоковедческих наук. Л.
- Рыбин В.В. 2005. Школа петербургского японоведения (от Дэмбея до учеников Н.И. Конрада). *К истории петербургской школы японской филологии. Сборник материалов.*/Сост. К. В. Головина, К.Н.Копылова, В. В. Рыбин.—СПб.: Изд-во СПбГУ., С. 8–57.
- Kobayashi, Kiyoshi. 2003. Der russische Japanologe Otto Rosenberg in japanischer Sicht. *Japanese Slavic and East European Studies*. Vol. 24, SS. 87–102.
- Father Nicholas 2006. Father Alexander 1928–2006. The Faithful Steward. *A Newsletter of the Holy Orthodox Church in North America*. Issue 24, pp. 6–7.
- アルバートフ V. P. 1992. 『ロシア・ソビエトにおける日本語研究』(下瀬川慧子、山下万里子、堤正典訳)、東海大学出版会〔Алпатов В. М. 1988. *Изучение японского языка в России и СССР*, М., 1988.〕
- 加藤九祚 2011.『完本 天の蛇 ニコライ・ネフスキーの生涯』、河出書房新社
- 北村孝一 2005.「解題 黒野義文「俄羅斯諺語抄日本語訳」」ことわざ研究会編『ことわざ資料叢書』第三輯第十卷(クレス出版): 4-5 頁〔本書 596-630 頁の影印収録〕
- 倉田一夫 1986.「解題 『日本諺語俚語及文句集成』」ことわざ研究会編『俚諺資料集成』第11 卷(大空社): 3-4 頁〔本書 457-595 頁の影印収録〕
- 倉田保雄 2007.『夏目漱石とジャパノロジー伝説—「日本学の父」は門下のロシア人・エリセーエフ』、近代文芸社
- 桜井良平 1974.「ベテルブルグの日本人教師 黒野義文」『窓』(ナウカ) 第8号: 31-34 頁。
- 桜井良平 1975.「ロシアの日本語研究—1870 年以降のベテルブルグ—」『日本語教育』(日本語教育学会) 第26号: 57-66 頁
- 佐藤純一 2000.「ロシア語教育関連略年表」日本ロシア文学会編『日本人とロシア語 ロシア語教育の歴史』(ナウカ): 427-430 頁
- 沢田和彦 2006.「黒野義文伝——東京外語露語科からベテルブルグ大学東洋学部へ——」柳富

子編『ロシア文化の森へ——比較文化の総合研究 第二集』（ナグ出版センター）：485-502 頁。

沢田和彦 2007.『白系ロシア人と日本文化』、成文社

ディボフスキー A. 2009.「極東ロシアにおける日本研究と日本語教育の行方—東洋学院（1899—1920）の日本学を中心に—」『言語文化研究』（大阪大学大学院言語文化研究会）第 35 号：95-117 頁

寺川喜四男、稲垣敏夫訳・註・編 1964. オ・ペ・ベトローフ原著『「ソ連の日本語」第一巻 レニングラード大学における日本言語学講座とその史的展開』、有明書房

西村庚 1964.「レニングラードにのこる日本人講師の伝統」『窓』10-5（1964 年 5 月）〔筆者未見〕

西村庚 1962.「埋れた明治の露語学者 嵯峨寿安と黒野義文」『ソ連研究』（ソ連問題研究会）第 11 巻第 5 号（117 号）：24-32 頁。

西村庚 1965.「黒野義文に関する聞き書きその他」『文献』（特殊文庫連合協議会）第 10 号：5-15 頁／『ユーラシア』1（1971 年）73-85 頁に再掲。

ヘボン J. C. 1872. 平文編訳『和英語林集成』再版、横浜（印刷上海）Shanghai American Pressbyteran Misson Perss.

ヘボン J. C. 1966. 美国平文編訳『和英語林集成』初版 1867〔慶應〕3 年（横浜—上海）の復刻、北辰

ヘボン J. C. 1980.『和英語林集成』第 3 版（東京：丸善商社、1886〔明治 19〕年）の復刻、松村明解説、講談社

渡辺雅司 2000.「旧東京外国語学校」日本ロシア文学会編『日本人とロシア語 ロシア語教育の歴史』（ナウカ）：39-49 頁

（インターネットサイト URL は本文中に示した。閲覧日は 2011 年 11 月 18 日。）

こばやしきよし（外国語学部国際文化交流学科特任准教授）